

## 支援体制の中での通級指導をめざして

伊丹市立笹原小学校

教諭 南川 佐都

### 1 取組の内容・方法

#### (1) はじめに

平成5年度に、通級による指導が制度化され、平成18年には学校教育法施行規則が改正されて、学習障害(LD)、注意欠陥多動性障害(ADHD)も通級による指導の対象とすべきことが提言された。その後、通級の指導を受ける子どもの数は、年々増加し、国の通級指導の充実に向けた整備が進んできた。

私は現在、学校生活支援教員として現任校の他に市内4校で、巡回による通級指導を担当している。それぞれの学校には、学習面や生活面での困難さを抱えている児童が多数在籍している。発達上の課題だけではなく、家庭環境や様々な課題を合わせ持つ児童も増加し、現場の先生たちは、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーと協力しながらも支援方法に苦慮している現状を目にすることが多い。子どもたちそれぞれの困難さの背景を十分に把握し、学校で子どもたちの力が発揮できるためには、通級指導教室の役割が非常に大きいと考える。通級指導の担当として、学級担任や保護者、特別支援教育コーディネーター、他校の学校生活支援教員との連携を通して、インクルーシブ教育の考え方のもと、各校で支援体制の中での通級指導組織の構築を進めている。

#### (2) 学校や学級に子どもの居場所があり、自分らしさが発揮できるために

##### ① 子どもの本当の願い

子どもの生活や学びの基盤となる学級や家庭で、なかなか自分の持っている力や良さが発揮できず、困り苦しんでいる子どもたちの姿をよく見る。中には、服のフードを頭から被り、机にうつ伏せて学習に参加しようとしないう児童がいたり、反抗的な態度が見られたりする児童もいる。

通級指導教室(本校ではステップルームとよんでいる)でも、その児童に個別に関わる中で、徐々に子どもの表情やつぶやき、学習の振り返りなどを把握することができ、子どもの本当の願いが少しずつ見えてきた。

#### 子どものつぶやき

- ・今まで、自分はだめやと思ってたけど、そうじゃなかった。
- ・あのな、私もみんなみたいにちゃんと間違えずに発表したい。
- ・みんなの前で、国語の本読みがスラスラとできるようになりたい。
- ・計算が早くできるようになりたい。
- ・九九が覚えたくても、覚えられへん。等

子どもたちの中には、がんばっても学習内容が理解できず、できないことが積み重なって自信さえ無くしている児童もいる。通級指導教室と学級と家庭がつながることで、子どもの困っていることを減らし、「私にもできる！わかる！」を増やし、自己肯定感を育てていくことを大切にしたい。そして、多くの時間を過ごしている学級や家庭で、身近な大人や友だちと信頼関係を築きながら、安心してその子らしさが発揮できることを願っている。

そのために、普段から学校生活支援教員として学級担任や家庭とつながり、子どもを支援していくことを大切にしている。

### ○連絡ノート（指導の記録）の活用

本校、巡回校ともに、学級担任や保護者へ学習した内容・児童の感想・指導の記録の情報を伝え共有することを重視している。伝達手段として、連絡ノートを活用することで様子を知ってもらうことだけでなく、学級担任や家庭とも連携した支援を実現することができている。

また、日々の通級の指導の記録として学習した全内容や児童や担当者の感想を管理職や特別支援教育コーディネーターに供覧することで情報を共有できている。

連絡ノート

### ○重要な継続指導

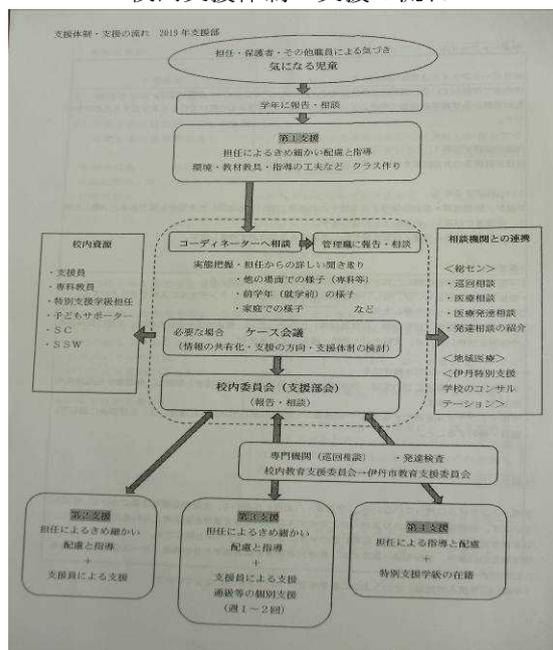
通級指導に通う子どもたちには、忘れ物が多い、九九が定着しない、漢字が覚えられない、友だちとすぐにトラブルになるなど、様々な課題がある。それぞれの子どもたちの苦しさに寄り添い、課題内容の背景を探り、具体的な手立てを考え支援を行っている。

その際、日常的に連絡ノートで支援や児童の様子を伝えていることが、常に現状を把握、共有することに効果的であった。学級と家庭で支援を連携して支援を継続することにより、わかることやできることが増え自信を持てる児童が増えてきている。

### ② 校内支援体制の構築に向けて

通級指導教室は、子どもにとってまず安心できる場所であることを大切にしている。しかし、これは通常の教室で友だちと一緒に学ぶことが難しいので、個別的な指導の場を選択するのではなく、子どもの在籍する学級が落ち着いて学習できる環境になっているか、先生や友だちとの関係は安心感が得られるものになっているか、授業はわかりやすく取り組みやすいものになっているか等、学級全体への支援も工夫していくことが大切になる。通級指導教室での支援が、学級や学校全体への支援につながることを重要であると考えます。

## 校内支援体制・支援の流れ



本校では、「教育のユニバーサルデザイン」をすすめる中で、学級作り・授業作りにも重点をおいて取り組んでいる。さらに、通級指導を、校内支援体制の中で上手く機能させるために、特別支援教育コーディネーターと常に連携している。

また、周りの先生方の意見を聞きながら、校内支援体制と支援の流れを明確にし、学校全体で研修を行い体制づくりを進めてきた。毎年度当初の全体研修会や夏季研修で周知し、個々のケースと合わせて、支援体制や支援の流れを職員全体でし、理解を深められるようにしている。

### (3) 学校生活支援教員研修会を通して

伊丹市内の学校生活支援教員で月1回～2回の研修会を行っている。伊丹市教育委員会学校指導課や総合教育センター、伊丹特別支援学校から講師を招き、通級指導教室の教材や指導内容、市内教育支援委員会や巡回相談の位置づけや職務内容、また発達検査の読み取り方などについての研修などを行っている。

学校生活支援教員としての考え方や位置づけがぶれないように、通級指導を行うにあたって『大切にしたいこと』を確認し、共有し合うようにしている。

#### 大切にしたいこと

##### ○学校の支援体制の中での通級指導教室の位置づけ

- ・通級指導につなげることが目的ではなく、学校の中での日々の支援が大事であること

- ・通級指導で取り組んでいることを、学級での支援にも生かしていくこと

##### ○各校の特別支援教育コーディネーターとの情報共有と連携

### (4) 巡回相談員としての役割

本市では、現在「発達に起因する特別な支援を要する児童の在籍する学校園の教職員に対し、当該児童に対する指導内容・方法に関して助言を行う」ことを趣旨として、伊丹市内の関係機関（伊丹市立総合教育センター、伊丹市立伊丹特別支援学校、県立こやの里特別支援学校、学校生活支援教員配置校）では、巡回相談を実施している。その中で、通級指導の必要な児童生徒について、まずは校内支援体制の中で支援を行うための指導内容や支援方法に関して、助言を行うことを共通理解している。そのため、各校の特別支援教育コーディネーターも同席し、まずは校内で十分に情報を共有し、校内における支援に生かすこととしている。

## 2 取組の成果

- (1) 連絡ノートを活用して、学級担任や家庭と常に連携しているため、子どもの学習上や生活上の困っていることへの支援を適切に継続して行うことができた。その結果、通級指導教室に通う子どもたちの生活面・学習面での困難な点の改善が徐々に見られ、子どもの自尊感情が少しずつ育まれている。
- (2) 通級指導や巡回相談を通じて、学級担任や特別支援教育コーディネーターと支援方法についてきめ細やかに話し合い、実際に支援を行うことができた。学校・学級の中で同一方向の支援を行っていくことの意識づけにつながった。

## 3 課題及び今後の取組の方向

すべての子どもたちが安心して生活し学んでいくためには、通級指導による個別の支援にとどまらず、日々の学級の中で一人ひとりの子どもたちを大事にした支援が進んでいくことが大切である。そのためには、学校生活支援教員として学級担任や保護者、特別支援教育コーディネーターとの連携を密にし、学校全体としての支援体制づくりを進めていくことが重要である。

校内や巡回校、市内の通級指導担当とつながり、支援方法や支援体制について、よりよい方向を模索していきたい。

今後は、様々な困難を抱え、つらい思いをしている子どもたちや支援方法に悩まれている家庭や先生方に寄り添いながら、通級指導や校内の支援を通して、自分に自信を持って歩んでいける子どもたちを育てていきたい。そのために、通級指導を校内での支援体制の中により確実に位置づけ、共通理解を深めるよう努力していく。